

# 海外における教育活動

## ～中米ホンジュラス共和国でのボランティア活動を通して～

伊丹小学校 教諭 山田 麗華

キーワード：技術移転、異文化理解、還元

### 1 目的と問題

#### 第1節 動機と目的

海外での教育活動に携わりたいと思った動機は2つある。1つ目は教職について5年目、6年生の児童に社会科の「世界の中の日本」という単元を、写真や地図を見ながら授業を行った時のことである。海外旅行や日々のニュースでしか海外について知らない自分が、世界から見た日本について指導することに、説得力のなさを感じた。「自分の目で見たこと、感じたことを子どもたちに伝えたい。」そのことがきっかけとなった。

2つ目は、自分とは異なる価値観と触れてみたいという思いを持ったことである。教職について5年が経ち、多学年の児童と関わり、先輩の先生方から多くのことを学び、出来ることも増えてきた。しかし、これから長く教職に携わるのならば、今の自分の価値観だけに留まるのは良くないのではないか、もっと広い視野から物事を考えなければならぬと思うようになった。

これらのことをきっかけに、海外での教育活動について調べ、今の自分が持つ技術が役立つ場所を探した。国際協力を行うことができ、且つ帰国後、伊丹の子どもたちに還元するため、現職での参加ができる青年海外協力隊を選んだ。

#### 第2節 派遣前研修

活動するにあたり、日本で2ヶ月、現地で1ヶ月の語学研修を受けた。特に日本での研修は語学だけに留まらず、宗教学や言語学、異文化理解についてなど、普段の仕事では知り得ない内容で、すべてのことが新しくとても興味深い内容だった。特に印象に残っているのが、多文化共生についての講義であった。話を聞くだけの講義ではなく、体験型の講義だった。5人程度のグループをつくり、白い紙と鉛筆、分度器などの文房具が各グループに配られた。それを使って何をするかは知らされず、私たちは一体何が行われようとしているのか、周囲の状況を把握することしかできなかった。しばらくすると、他のグループの人たちから、鉛筆を借りたいとの要求があった。なぜ必要なかは分からずひとまず手渡した。どうもグループによって渡された文房具が違うらしく、鉛筆がないグループは作りたいものを作れずに困っていたようである。その内、状況が少しずつ理解できてきて、作ったものを売って稼ぐシステムになっていることが分かった。

結論から言うと、私たちのグループは開発途上国、少しの資源(鉛筆)はあるが、どのようにして国を豊かにすべきか、その方法が分からない国という設定だった。そして資源を持ち、何をすべきか分かっているグループは先進国ということだった。最終的には私たちのグループは先進国の一つに吸収され、唯一持つ資源を貸し出すことで、国の傘下に入った形でおさまった。

同じ先進国のグループでも、周囲に威圧的で寄せ付けないグループもあれば、みんなでお互いの国を豊かにしていこうと考えるグループもあった。私はたまたま立場の弱いグループに所属したことで、謙虚に接することしか出来なかったが、その威圧的なグループの人たちも、立場が違っていたら違う考え方をしていたのかもしれないと思うと、置かれている状況で人の考え方で左右されることの怖さを感じた。この体験は、私が派遣される後進国が置かれている立場を理解する手助けとなった。

このような研修を終え、2012年6月から2014年3月までの1年9か月間、派遣されることとなった。

#### 第3節 活動組織・要請内容

私が参加した JICA(国際協力機構)は、日本の政府開発援助(ODA)を一元的に行う実施機関として、

開発途上国への国際協力を行う機関である。地域や国・課題別アプローチを組み合わせ、開発途上国が抱える課題解決を支援している。年間 1000 人を超える青年海外協力隊員たちが世界各国へ派遣されている。私が派遣されたホンジュラス共和国においては、算数指導力向上プロジェクトを立ち上げ、特に算数教育向上に向けた支援に力を入れている。算数隊員として、私が派遣されるにあたり、受けた要請内容は以下の 4 点である。

1. 配属校や地域の学校において、教室レベルでの算数指導力向上にむけて、助言や支援等を行う。
2. 関係する教員に対し、配布教材の適切な使用法、教授法などを理解させる。
3. 同じプログラム隊員等と目標達成に向けて共通認識を深め、連携して教材作成・教員研修等を実施する。
4. 隊員の発想に基づき、事務所と配属先学校長と合意し、プログラム目標達成に有効な活動を実施する。

以上のことを目標に掲げ、日々の教育活動に従事した。

#### 第 4 節 派遣国・生活地域について

ホンジュラス共和国は、中央アメリカにあるカリブ海に面した国で、日本の約 3 分の 1 弱の面積を持ち、約 810 万人が住む国である。日本から飛行機で約 1 日かかり、スペイン語を公用語とするカトリックの国である。18 の県から成り立ち、主産業は農林牧畜業で、コーヒーやバナナ、エビ等を養殖しており、日本とも貿易を行っている。

四季のある日本と違い、1 年が 12 月から 5 月はじめ頃までの乾季と、5 月中旬から 11 月頃までの雨季に分けられる。年間を通して温暖な国である。人々は陽気で温かく、バスやタクシーで乗り合わせた時は気軽に話が出来るような気さくな人柄である。

私が派遣されたバジェ県ナカオメ市は、国内で最も暑い地域として知られ、年間を通して 30 度近くあり、果物などが豊かに実り、自然豊かな地域である。活動期間中はホームステイをしていたため、家族と接することでホンジュラスの食文化や生活習慣を知ることができた。停電や断水が頻繁にあり、雨水を貯めて生活用水として使っている。洗濯も手洗いが一般的。また、暑くても寒くても空調はほとんど使わず過ごしている。また、ホテルにも湯船がなく、水シャワーだけのところが多い。

ホンジュラスには日本で使用されていた消防車や救急車が走っていたり、日本人がホンジュラスで橋や建物を作ったりしていることも知った。

#### 第 5 節 算数指導力向上プロジェクト (PROMETAM) の背景

ホンジュラス共和国は、派遣当時 2015 年までの初等教育の完全就学達成、およびスペイン語・算数の学力向上を目標に掲げていた。しかしながら、現状では、純就学率が 87% と高い一方、修了率は、68.5%にとどまり、入学児童のうち約 3 分の 1 が小学校卒業よりも前に中退している。また留年率も高く、入学後 1 度も留年せず正規の 6 年間で初等教育を修了する児童は、わずか 31.9% である。従って、留年と中退の克服が上記目標の主要課題である。

ホンジュラスにおける留年の主な原因はスペイン語と算数の成績不振である。課題として、教材の有効活用のための支援、ホンジュラス側人材の教材開発能力向上などが確認された。本国では 1989 年から継続して基礎教育強化隊員が配属されており、チームによる算数プロジェクト続いている。

現在、国立教育大学付属校では PROMETAM と協力し、引き続き指導力向上のための研修会等が行われている。また、他県でも県レベルで教員の知識向上・指導力向上を目指した研修会が行われており、エルパライス県では「プロエバ」(PROEPA)、バジェ県では「プロエバ」(PROEVA) というプロジェクトが独自に立ち上げられ、「研究授業」「参観授業」「タレアディアリア (基礎計算の強化)」「学級経営」「教材作成」という 5 つの内容を推進している。これを受け、隊員の配属校でも同じ目的の研修会を行うことが増え、「研究授業」「参観授業」の趣旨・利点を学校の教員たちに説明し理解を求め、「タレアディアリア (基礎計算の強化)」によって計算力を向上させる取り組みが行われている。

## 第6節 現状と課題

ホンジュラスの小学校は校舎の数が足りず、半日だけの学校が多くある。残りの半日は中学生が同じ校舎を使っている。私が活動していた小学校では、4年生以外は各学年2クラスずつ、全11クラスあった。1クラスの人数は3年生までは30人程度、4年生から6年生までは40人程度となっている。保護者が希望する教師のクラスに入学させるため、同学年でもクラスの人数には差がある。日本と違い学期制ではなく、2月に始まり11月まで授業がある。その後2ヶ月間(12月と1月)の長期休暇がある。



小学校の教室の様子

児童は昼食がない代わりにメリエンダという、30分ほどのおやつのある時間がある。トルティーヤ(とうもろこしの粉で出来た生地)に煮た豆を挟んだものや、サンドイッチなどを食べている。スナック菓子で済ます子どももいる。家から持ってくる子もいれば、学校の中にある売店で買う子どももいる。

学習机は学校で準備するが、教室により形も大きさもばらばらで、使い勝手が悪い。また、椅子は家から持参する義務があり、ない児童もいる。鉛筆や消しゴムなどの文房具は、貸し借りをする姿がよく見られた。ノートはまっすぐおへその前に置くのではなく、横向きにして書くのが一般的で、姿勢の崩れが気になった。以下感じた問題点を挙げる。

### 1. 教員の指導力・知識不足

- (1) 指導書を効果的に使用しておらず、教科書を写すだけの授業が多く見られた。
- (2) 指導内容を理解しておらず、間違った内容を指導している例があった。
- (3) 学級経営ができておらず、児童が話を聞いていない場面が多く見られた。
- (4) 児童の興味を引き、且つ理解をはかるための教材を活用していない。

### 2. 児童の学習意欲・知識の不足

- (1) 基本的な学習態度が身につけておらず、授業中に飲食する姿が見られ、集中して学習に参加しようという意識が薄い。
- (2) 基礎的な学習が身につけておらず積み上げがない。

## 2 本論

### 第1節 県教育事務所での活動

配属先であるバジェ県教育事務所には、算数教育プロジェクトを推進する部署があり、その職員と共にプロジェクトの目標達成のため活動をともした。プロエバが推進する下記の5つを中心に活動を進めた。

- ・タレアディアリア (基礎計算の強化)
- ・学級経営
- ・参観授業
- ・研究授業
- ・教材づくり

教育事務所の職員と JICA 職員と相談し、バジェ県の小学校における教員と児童の算数学力向上を目指し、主な活動を以下2点に定めた。

1. プロエバ (PROEVA) の5つの活動を進める。
2. 活動校で、教師・児童の2側面から支援を行う。

1つ目の目標を達成するため、以下3つの活動を行った。

#### (1) 研修会の開催

目的：教員の知識向上をはかることで、正しい指導をすることができる。

授業方法を学び、普段の授業を改善することができる。

開催の流れ：

##### ① 県下4市においてモデル校の決定

主に研修会を行う学校を市に1校選び、モデル校となるよう研修会を開催した。

② 教員（授業者）の選定

研修会の授業者として、現地の教員を選出し、事前に算数隊員と授業づくりや教材づくりを行った。

③ 教育事務所職員と授業者、算数隊員の会議

教材の作成や算数隊員による知識研修、模擬授業を通して授業者と授業づくりを行った。

④ 研修会の開催

教育事務所職員が選出した各市約 30 人の教師に向けて、研修を行った。

回数：4 市で年に 6 回、土曜日に開催。年度末に 4 市合同研修会を開催。

内容：確認テスト（第 1 回目と 6 回目）

知識研修

教材づくり

確認小テスト

(2) 研究授業の開催

目的：現地の教員の公開授業を見ることで、授業方法を学ぶことができる。

開催の流れ：

① 算数隊員の元活動校において、授業者を決定。

上記の小学校においては、数年にわたり日本人隊員が継続して活動してきた背景があり、活動に協力的で知識を持った教員が多い。

② 授業者と算数隊員による授業づくり

指導案作成と板書計画、教材づくりの 3 つを中心に授業づくりを行った。

③ 県教育事務所の職員との連携

県の活動として計画し、教育長に提出。職員も授業を観察した。

④ 研究授業の開催

算数隊員の活動校の教員にも呼びかけ、公開授業を通して授業の方法を観察できるようにした。

回数：年に 7 回開催。

内容：公開授業

事後研究（意見交換）

アンケート

(3) 参観授業の開催

目的：教員の授業を保護者に公開することで、保護者が児童の学習内容を理解するとともに、学習への関心を持ち、参加の必要性を感じることができる。

教員が公開までの授業づくりを行うことで、授業方法を学ぶ機会となり、公開することでよい刺激となり、自信を持つことができる。

① 活動校において、授業者を決定。

私の主な活動校では、算数隊員が活動するのは初めてであり、赴任して半年後に授業者を決定した。

② 授業者と算数隊員による授業づくり

指導案作成と板書計画、教材づくりの 3 つを中心に授業づくりを行った。

③ 県教育事務所の職員との連携

県の活動として計画し、教育長に提出。職員も授業を観察した。

④ 研究授業の開催

算数隊員の活動校の教員にも呼びかけ、公開授業を通して授業の方法を観察できるようにした。

回数：年に 6 回開催。

内容：公開授業  
アンケート（保護者・授業者）



隊員と現地職員の会議



研修会の様子



研究授業の様子



参観授業の様子

## 第2節 所属小学校での活動

続いて2つ目の目標を達成するために、活動校である小学校において次の活動を行った。

- ・授業観察・助言
- ・教材作成
- ・研究授業
- ・参観授業
- ・知識研修会
- ・テストの実施

まず、教師の指導力・知識不足を補強するため、授業観察後にメモを渡し、よい点や改善点を伝えた。また、1時間の授業の板書を写し、それをもとにアドバイスをした。

全職員に向けて研修会を開き、指導書の使い方や授業方法、板書の仕方、教材の作成方法などを伝えた。その他には、学級経営の方法として、学級ルールづくりを促し、各教室に掲示するようにした。さらには児童の興味を促す算数を使ったゲーム感覚での学習方法も伝えた。

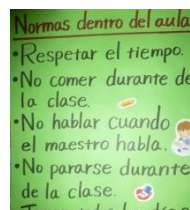
児童の側面からは、出来るだけ毎日基礎計算ドリルを行い、計算力が身に着くように指導した。また、九九テストを行い習熟を図った。すべての段を暗記した児童を全校生の前で表彰することで、取り組む意欲につなげた。さらに毎月既習学習内容の小テストを行い、習熟を図った。



教材活用の様子



授業の導入(かけ算ゲーム)



クラスルールの掲示



九九の表彰の様子

## 第3節 元隊員配属校での活動

午後の時間を使って週2回、元日本人ボランティアの配属校で教員の授業観察や児童の基礎計算の強化が図れるよう活動した。本小学校は過去に算数隊員が継続して活動していたため、授業方法や板書計画、教材作りを自ら行うことのできる教員もいる。しかし、教員の入れ替わりにより指導方法に差があることや、指導方法が定着していない教員は、日本人ボランティアがいなくなった後に継続して指導するのが難しいなどの現状があった。これらのことを改善するため、授業づくりの相談に乗ったり、アドバイスを رفتたりした。

それ以外にも、研究授業や基礎計算ドリルの実践研究会の授業を一緒に作ることで、さらに指導力の向上をはかった。また私が活動する小学校にもその活動が広がり、教員間の交流が図れるよう合同の研修会を開いた。

#### 第4節 国内算数教育研修の実施

活動を行う中で、各県や各学校で行われている活動をお互いに情報交換し共有する場所は、教員の知識や指導力、さらには意欲の向上に繋がる。県教育事務所や学校という限られた範囲の中で活動をするにあたって、問題点は把握できているが、なかなか解決策が見いだせなかったり、本当にこれでいいのだろうかという疑心暗鬼の中で活動したりしている場面も多い。本研修によってこのチームプロジェクトに関わる算数隊員とカウンターパート(主に一緒に仕事をする現地の教員、以下CP)が一堂に会し、実践やワークショップを通してお互いに学び、刺激し合うことで、今後の活動の一助となることをねらい開催した。

18 県ある中で隊員が主に活動する 9 県の代表者(算数隊員の教育事務所職員や教員)が集まり、首都で 2 泊 3 日、以下の目的で研修を行った。

1. 算数隊員や CP 同士の算数科教育についての意見交換を通して、ホンジュラス国の算数教育に対する考えをより深め、共通理解の基に協働して活動していくことを目指す。
2. 各地域における算数隊員と CP の日ごらの活動、それぞれの任地での授業実践や研修会の情報を共有し、今後の活動においてそれらの経験を自身の活動に有効活用する。
3. 実践やワークショップを通して、授業や研修会、研修システムの構築のあり方について学んだり、よりよい方法を検討したりし、今後の更なる活動の発展を図る。
4. この研修を通して、教員や県職員としての意識・意欲の向上を図り、今後、CP 自身が自発的、継続的に研修会等を企画運営できるようにする。また、CP 同士の連携を促し、本研修会後も情報交換ができるような連絡体制を作る。

#### 実施内容

1. 各県(隊員配属校も含めて)の算数支援などの活動内容のプレゼンテーション  
研修会等の情報を共有し、自県との共通点、相違点を知ることで、今後の研修会の在り方をお互いに考える機会にし、より一層の研修内容の充実を図る。
2. 算数分野であげられる問題解決のための教授法研修会  
2013 年度の全国共通テスト分析結果より、児童が苦手な点を知る。  
事前に各県に 1～2 つずつ課題を渡し、各自それを解決するための準備をする。当日はホンジュラス教員たちが主体となり教授法を提案しあい、お互いに知識を深める。
3. 研究授業観察方法についての講義  
翌日の「研究授業及び研究協議会」をより深めるために、授業参観においてどのような視点が必要かを伝える。
4. 研究授業及び研究協議会  
国立大学附属小学校での研究授業参観と研究協議会の実施。国立大学附属小学校のホンジュラス教員が行う授業を視点にそって参観する。その後の研究協議会では、授業者に、今回の授業のプランニングについての考え方(授業の組み立て方、教科書(GM)や黒板の使い方、授業づくりにあたっての苦労など)を解説してもらう。その後、本授業についての疑問や意見等を、参会者と交流しあう。
5. 研究協議会における検討方法の提案  
KJ 法の利点は、研究協議会で全員が発言でき、継続することで授業を見る視点が育つことである。事前に行った授業観察視点の講義や研究授業を活かし、KJ 法を実践する。本研修会後に、各県や地区で参会者たちが主となり、進行役として活動できるような検討方法を提案する。
6. 小中交流会  
学校が抱える願いや問題点を相互に発表し合い、情報の共有・理解を図ることで今後の指導に活かしていくことがねらいである。普段一緒に活動することのない小中の参加者が集まるこの機会に、小学校からの積み上げの大切さを改めて考える場になることを期待する。



各県のプレゼンの様子

### 7. アクションプラン作成

これからの活動をより一層充実したものにするために、隊員と CP が今までの活動や本研修で学んだことを活用し、今後の活動計画について話し合う。年度初めということもあり、やるべきことを具体的に話し合い計画することで手立てが明確になり、参加者全体の意欲が高まることを期待する。



アクションプラン作成

### 8. 教材紹介と展示

各県で作成した教材の発表や展示を通し、教材に対する見地を広げ、算数指導にとってより有効な教材の作成を推奨する。

## 第5節 算数会議の実施

3ヶ月に1回首都で全算数隊員が集まり、会議を行った。それぞれの活動の経過報告を行い、情報共有を行った。活動期間中に2度の報告会があり、先輩隊員の間接報告や最終報告を聞くことで、良い実践を自らの活動に活かしていった。

年に4回に渡り新隊員が派遣されるため、新隊員に向けてのオリエンテーションなども行って、隊員の活動が継続的に行えるようにした。

その他にも児童を対象にしたテスト問題づくりや国内研修の計画・実施について、現地の教育コンサルタントと一緒に良い方法を話し合った。

## 第6節 日本との交流

前任校の校長を通して「ホンジュラス通信」を送り、全校生に配布していただいた。ホンジュラスの文化や小学校の様子を中心に伝えた。前任校の先生たちが日本の絵本やお菓子などを送ってくださるとともに、ホンジュラス通信を読んだ子どもたちの感想なども伝えてくださった。先生たちとの交流もあり、出発前に担任していた学年の子どもたちと skype(インターネットを使った音声通話)で話をする機会を持つことができた。6年生の社会科の学習の一貫で、子どもたちの疑問に私が答える形式だった。ホンジュラスのくらしや学校の様子、私が行っている仕事について話した。また、日本のよさや将来に向けての話をした。卒業を控えた子どもたちに現地から声を届けることができ、貴重な時間となった。

## 3 結果

### (1) 県教育事務所での成果

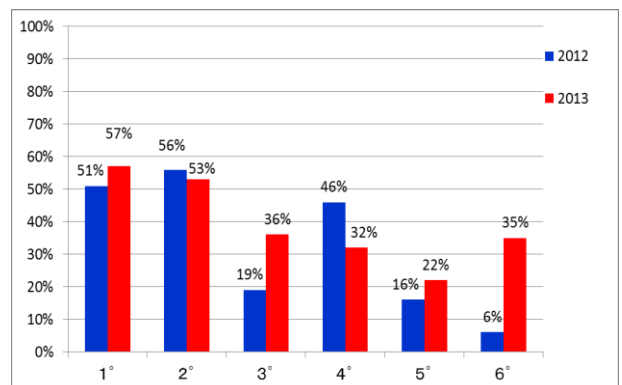
研修会の成果としては、第1回目と第6回目の研修会で同じテスト(小学校6学年の学習内容程度)を行い、1年間の学習成果をはかると、最終テストの正解率が高くなっていった。第1回目のテストの正解率が40%だったのに対し、70%に向上した。

教師が小学校の指導内容の知識を以前より習得することができ、教材の作成・活用方法、授業づくり、板書計画の方法などを知ることによって、普段の授業に活かしていた事例があった。

その他には、自分が得た知識を同僚の教師へ普及させるなどの事例も見られ、広範囲に影響を与えることができたことも成果として挙げられる。

### (2) 所属小学校での成果

- ・教員が自発的に教材を作成し、授業で活用するようになった。
- ・教科書を基準に授業を行うようになった。
- ・教材研究の大切さを実感し、自発的に教材研究する姿が見られた。
- ・児童の学習態度の大切さを認識し、学習ルールを守るよう指導する姿が見られた。



- ・復習の大切さを認識し、宿題を出したり、授業の中で復習を取り入れたりするようになった。
- ・公開授業を行った教員は、授業を公開することの大切さを実感し、必要性を感じていた。また、認められることで自信を持って授業を行う姿勢につながっていた。
- ・参観授業を開くことで保護者の関心が高まり、問題の解き方について質問をする保護者もいた。
- ・児童が意欲的に授業に参加するよう、ゲームを取り入れたり、教材を活用したりと、工夫した授業を行う姿が見られた。

前項のグラフは各学年の児童の1年間の成績の推移を表したものである。特に高学年において成績に伸びが見られた背景には、担任が基礎計算の復習を繰り返し行っていたことが大きい。授業改善の工夫をしていたクラスほど伸びが見られた。

### (3) 国内研修の成果

- ・参加したホンジュラス人の教員がとても刺激を受けていたようで、作成した計画をその後継続して実行している姿が見られた。
- ・ホンジュラス人が主体となって行うという趣旨が参加者に伝わるような運営の仕方でよかった。
- ・ホンジュラス人同士のつながりができ、今後の活動を協働できるよう期待したい。
- ・他県の活動を知ることで、自身の県の活動や学校現場での活動を見直す機会になった。
- ・算数隊員にとって、現地の教員と同じ時間を共有し、計画を一緒に考えるなどの活動を通し、さらに関係を深めることができた。

## 4 まとめと課題

活動をする中で感じたことは以下3点である。

### (1) 授業を行う難しさ

当然ながらスペイン語で授業をするということは難しいことであった。活動前に語学研修を受けているとはいえ、突然の質問や予想外の児童の反応に困惑したことが何度もあった。

また、ホンジュラス共和国から要請されているにも関わらず、当事者である現地の小学校の教員が日本人に指導を受けることを望んでいるわけではなかった。手を挙げて日本人の派遣を望んだ管理職さえ、協力的というわけではなかった。当然のことながら、ほとんどの教員は長年教職に就いて経験を積んでおり私よりもベテランの教員である。年齢・経験年数も浅い若い日本人に、なぜ算数を教えてもらわなければならないのか、という思いが伝わってくるようだった。そのようなこともあり、1年9か月の活動期間の前半は、関係づくりに徹することにした。

国定教科書であるにも関わらず、日本人が指導方法を伝授することで、異色なものだという受け止め方をしており、信用して活用するまでに時間がかかった。

### (2) ホンジュラスの現職教員の算数の知識の低さ

ホンジュラスの教員の多くは、小学校の指導内容を理解していない。間違った知識で指導している場合も度々ある。特に分数や小数、割り算の筆算の方法は間違って指導している例が多々あった。教員に基礎的な知識がないため、まずは教員に対しての指導が必要だと感じた。公立の小学校の教員になるための試験はなく、免許さえあれば誰でも教員になれる。また、クラス替えはなく、6年間ずっと同じ教員が同じ児童を指導するというのも珍しくないため、知識に偏りができると考えられる。

### (3) ホンジュラスの国民性(時間・きまりの寛容さ)

ホンジュラス人は、時間やきまりに対して寛容である。授業についての話し合いの約束をしていても、時間通りに行こうという意識がなく、待ち合わせの時間に遅れるばかりか、来ないことが多くあった。また、授業の開始時刻に遅刻したり、休み時間の後なかなか教室に戻って来なかったりということが度々あった。教室に食べ物や飲み物を持ち込み、飲みながら授業を行う姿も見られた。



## 課題

### 県教育事務所での活動

研修会を行う授業者選びに苦戦した。なかなか話し合いがうまく持てず、現地の教員が主体的に授業づくりや教材づくりをするところまで至らなかった。日本人ボランティアが主導となる授業だと、教員が受け身になってしまっているように感じられた。

日程の変更や教育事務所による呼びかけの有無にも影響したが、地域によっては第1回目の研修会から第6回目の研修会までに、徐々に参加人数が減っている現状があった。

### 所属小学校での活動

- ・当たり前だが、日本人の活動に協力的である教員もいれば、そうでない教員もいるため、どの教員と活動していくかを判断する難しさがあった。
- ・県の活動と活動校での活動の両立が難しく、どっちつかずの状況になりがちであった。
- ・「技術移転」がJICAの大きな目的であるが、それを定着させることの難しさを感じた。活動期間の短さや文化の違いから、馴染んで定着するには時間がかかると感じた。
- ・教材費が確保できないことから、教材を自ら作成することが現実的に難しかった。

### 国内研修について

- ・ホンジュラス人同士の繋がりを密にし、研修会を運営し続けることが大切である。そのためには出張の時など、先生方が学校や配属先からの許可を得られるようにすることが必要だと感じた。
- ・食事内容やメリエンダ（軽食）、飲み物など、運営をスムーズに行うために必要なことを考え、会場を選ぶ必要がある。
- ・中学校に配属のボランティアが増えているので、関わりも考えていかなければいけない。
- ・現地の教員から「よい授業をみる機会が少ないため、どうやって授業を展開したらよいのかわからないのではないか。」という意見があったので、授業参観の機会も必要だと感じた。
- ・学んだことをどう実践するかが難しいので、すぐに活用できる効果的な基礎計算の方法や、板書計画、授業計画など良い授業を作るための日常の実践を学ぶ時間が必要である。
- ・KJ法を使っての話し合いのときに、授業の戦略やポイントを理解するのがホンジュラス人には難しいと感じた。研修内容ではないかもしれないが、良い授業とそうでない授業を実際に比較させながら、細かく教えていく必要があるのではないかと感じた。
- ・基本的な学習規律を身につけるため、先生の話聞く時は聞く、問題を解く時は解く、など基礎的な指導が行き届いた授業づくりも意識して行っていく必要がある。

## 結論

2年間にわたる研修と活動を終え、海外での教育活動に従事したことや現地の人々と生活をともにした経験は、自分の価値観や考え方を改めて考えさせてくれる大切な時間となった。

教育の側面から感じたことは、私たちが受けてきた義務教育は、実は日本に当たり前にある教育環境によって成り立つものであるということである。生きていくために必要な基礎学力は自然に身につくものではないと思い知った。改めてホンジュラスと日本の教育に大きな違いを感じた。ホンジュラスにない重要な日本の教育環境は以下のことである。

- 1 学習に必要な教具や教材がある。
- 2 教科書が無償で1人に1冊ずつ配布される。
- 3 学校で学習時間が確保されている。
- 4 栄養を考えられた給食がある。
- 5 決められた家の仕事がなく、学業に集中することができる。
- 6 多くの子どもが将来に希望を持って学習できる。

## 7 教員の質(教育実習や免許取得に向けた学習, 採用試験など)が高い。

日本では当たり前にある環境が、派遣先では当たり前でなく、その中で出来ることを考える難しさを感じた。日本の小学校で行っている指導方法を理解してもらうことは容易ではなく、日本だから出来ることだという現地の人々の考えをなかなか変えることができなかった。創意工夫しながら現地の人たちも継続して出来る方法を考え、まずは使ってみてそのよさを知り、実感してもらうことが大切だと思った。そして日本の教育のよさを知り、それが当たり前ではないことを子どもたちに伝えていきたいと思った。教員として自分ができることを実行していこうと思った。

生活場面では、日本での常識が通用せず、ことばも通じず、思いも通じずストレスに感じた時期もあった。しかし異文化を理解することは、一度自分の常識を捨て、相手の考えをいったんは受けとめることが大切だと学んだ。そのために現地のことばをできる限り覚え、互いの食文化を交流したり、スポーツを通してコミュニケーションをはかったりするようにした。ことばが違っても思いは通じることを改めて感じた。また、日本について質問され、自分がいかに日本について知らないかを思い知った。日本について自信を持って説明できるようにしておく必要性を感じた。動機の1つでもあるように、日本が世界の中でどのような立場にあるのか、知識として持つておかなければならないと感じた。

### 日本のよさと気になったこと

海外で生活することで、日本のよさとそうでない面を考える機会を持った。よい面は、第1に安全で安心且つ衛生的な生活を送れることである。現地では、危機意識を高く持ち、身を守る方法を身に付ける必要があった。3ヶ月に1回首都での研修の度に、ホンジュラスの治安状況についての講義があり、危険地域についてと安全管理の仕方についての説明を受けた。所持金は常に服の内側に隠し持ち、特に交通機関を利用する際は最新の注意を払う必要があった。日本がいかに安全な国であるかということに気づかされた。

また、食文化の多様さもすばらしいと感じた。食材の多さもあるが、その調理法や色使いなど様々な工夫があると改めて思った。世界にも認められている日本食の文化を大切にしなければいけないと思った。

さらに、式や行事など儀式を重んじる考えがあり、勉強以外にもいろいろ経験をやる場がある。私が活動していた小学校では、体育や音楽、図工などを含む情操教育の時間がほとんどなかった。また、指導できる教員がいなかった。国歌や国旗掲揚等が重んじられているため、よけいにこれらの教育の大切さも身をもって知った。

反対に日本にいと、ものがあふれ情報量が多く、自分にとって大切なことが見えにくいように感じた。与えられるばかりで、本当に必要なものを見落とししてしまいがちと感じた。ホンジュラスでの生活の中で、自分が本当はやってみたいことが、忙しい日本の生活の中で後回しになっていることに気づいたことがあった。それを忘れないように書き留め、帰国後に実行している。

任期を終え日本の空港に着いた時に特に感じたことが、人と人との関わりが薄いこと、無駄なものが多いということ、仕事中心の生活をしていることだった。バスで出会う見知らぬ人と会話したり、誰かが重い荷物を持っていたら自然と運んだりというホンジュラスでは当たり前の光景が、少ないように思った。また過剰なサービスがとても気になった。

いろいろなことを感じ、日本での仕事に復帰した。この2年間の経験を忘れないようにしたいと思っている。身近な人々にホンジュラスの体験を伝えているが、肝心の日本の子どもたちへの還元は、教え子たちに話をしたり、経験を伝えたりと個人のレベルでしか実行できていない。今後は担任を持った時にクラスの子どもたちやその保護者にも経験から感じたことを伝えていきたい。